

しんあい

発行日：平成23年7月1日

●特別養護老人ホーム裕生園
●ケアハウス シャトル
●グループホーム たちばな
●きんかん 小規模多機能ホーム
〒880-2221
宮崎県宮崎市高岡町内山 2407-3
TEL.0985-82-0196(代)
メールアドレス
yuseien@qtnet.ne.jp

発行：社会福祉法人 信愛会 ホームページ <http://www.sin-ai.or.jp>

第
24号



気持ちのいい秋晴れのもと、コスモス満開の西都原公園に遠足に来ました（平成22年11月）

ごあいさつ



社会福祉法人信愛会
副理事長
辰元 圭子

社会福祉法人信愛会の副理事長として、四月一日に就任いたしました。年々厳しくなる経営も、今後は法人全体をしっかりと見つける時になる、と思っていた矢先、三月十一日の東日本大震災が起こり、早や四月月になろうとしております。

今私達がお世話をしている80代、90代の方々が、日本の終戦後の復興に努力して、今までの日本の経済発展があり、「安心・安全・美しい日本」を世界に印象付けて来ましたが、今、毎日の報道を目にすると、大震災は美しい日本の風景を変えてしまいました。

夜も真昼のように明るい電灯・ネオン・便利な電化製品を「当たり前」のように使い、原子力発電という科学技術によって支えられていたという事を思い知らされました。今までの生活が「当たり前」になっていた日本人の平和ボケ的な考えを変えてくれたのが、今回の大震災や原発の事故ではなかったでしょうか。

これから私達は「生き方」を変えて、先人に見習い原点に戻らなければならぬと思います。今回の大震災は東北の人達だけが受けるものではなく、全国民が「痛み分け」しなければならぬと思います。日本人は勿論、全世界の多くの人達がボランティアに精を出し、「何が出来るのだろうか」と考えて、「頑張ろう東北」と義援金を集めたり、と国民全体が「人の為に生きる」という気持ちで生活をしなければと思います。

過去の関東大震災や敗戦後の焼野原からの復興に先人達は世界が驚くほどの回復と復興をして来ましたが、その先人達の終末ケアをしている私達の仕事は、安らかに、幸せに看取る事だと思えます。

回歸疫、新燃岳噴火、東日本大震災。。。

平成22年から23年にかけては、天変地異としか言い表せないような厄災が次から次に、宮崎を、日本を、襲いました。家畜の伝染病である口蹄疫が宮崎県内に広がり、約29万頭の家畜が処分されました。口蹄疫が終息したかと思うと、年が明けて平成23年1月に霧島連山の一つ新燃岳が52年振りに爆発的噴火を起こしました。そして3月11日、世界を驚がくさせた東日本大震災が発生したのでした。

こうした厄災続きの中、信愛会は直接的な被害は幸いありませんでしたが、利用者の御家族で口蹄疫の影響を受けた方がいらつしゃったり、消毒作業のため職員で通勤ルートに影響が出た人がいたり、新燃岳の火山灰の除去作業もありました。将来、日向灘沖の大地震も予想されています。いざという時のために、常日頃から万全の備えをしておきたいものです。



空の三分の一を覆う新燃岳の噴煙。ただならぬ気配が漂います。



公用車に降り積もった火山灰。窓から外は見えません。



雪ではありません。灰です。文字通り“灰色”になった辰元病院駐車場。



息子さん夫婦と国富町職員がお祝いに駆けつけてくださいました。辰元圭子園長も一緒に記念撮影。

本田秀磨呂さん 百歳のお祝い

裕生園入居者の本田秀磨呂さんが、平成二十二年九月十一日に百歳の誕生日を迎えられました。本田さんは国富町出身。現在、裕生園の男女を通じての最高齢になられます。おめでとございます。

『泣くよかひつとべ』発行

平成二十一年六月に亡くなった辰元忠前理事長を偲ぶ追悼誌『泣くよかひつとべ』が平成二十二年六月に発行されました。大変ユニークだった前理事長を彷彿させるエピソードが満載で、辰元グループの発展の歴史を知る証言集ともなっています。宮崎県立図書館でもご覧になれます。



故辰元忠前理事長のご家族、ご親戚、ゆかりのある方々、職員、OB等、60名を超える執筆者による追悼誌

じゃあつわん



特別養護老人ホーム裕生園
園長 川越 淳

この度、平成23年4月1日付で裕生園の園長に就任いたしました。もとより微力ではありますが、誠心誠意、職責を果たして行く所存ですので、どうぞよろしくお願い致します。

私は15年前の平成8年に裕生園に入職し、生活相談員（当時は生活指導員と呼んでいました）として5年間、その後事務長として10年間勤務して参りました。最近の6年間は副園長も兼務しておりました。今年の冬、辰元園長（現副理事長）より今回の人事についてお話があった時、まず驚き、そしてうれしさが生じ、いろいろ思い巡らしていると今度はその職責の重さに文字通り押し潰されそうな重圧を感じて恐怖した事もありました。現在もそこから完全に脱したわけではありませんが、恐らく今後もずっとそのプレッシャーを感じながら仕事をして行くことになると思います。覚悟を決めなければプレッシャーに負けてしまいます。

3月11日にマグニチュード9.0の巨大地震が三陸沖で発生し大震災を引き起こしました。3カ月経った今も多くの住民が避難生活を余儀なくされ、福島原発事故は収束の目途も立っていません。地震発生メカニズムを知ると、プレート同士がせめぎ合うまにその場所に位置する日本では、巨大地震の発生は避けられないことがわかります。ただ、それがいつなのか、どこなのか、が正確には予知できないために震災となってしまう。宮崎の日向灘沖でも大地震発生の可能性があります。その時、私達はどうか行動すべきか。「備えあれば憂いなし」と言います。今のうちに多くの人達の、いろいろな立場・視点からの知恵を集めて、被害を最小限に食い止める方策を立てて行かなければならないと思います。

園長就任と東日本大震災発生が重なり、入居者の皆さんとたくさん職員が集まるこの裕生園の施設長として、いざという時に適切な行動ができるよう、常日頃からハード面・ソフト面、そして心の準備をしておかなければならないと思う次第です。

平成二十二年度を迎えて



社会福祉法人信愛会
統括事務長 中岩 哲也

私は、平成二十年三月十六日にケアハウスシャトル事務長として辞令をいただいてから、三年三ヶ月が過ぎました。この三年三ヶ月の間、認知症デイサービス、きんかん小規模多機能ホーム、シャトルの特定施設化などの新規事業立ち上げに携わらせていただき、大変勉強になりましたし、新参者にそのような機会を与えていただいたことに心から感謝をしています。

現在、社会福祉法人信愛会の事業所は「特別養護老人ホーム裕生園」「ケアハウスシャトル」「グループホームたちばな」「たちばなデイサービスセンター」「裕生園訪問介護ステーション」「たかおか居宅介護支援事業所」「養護老人ホーム長寿園」及び「きんかん小規模多機能ホーム」の8事業所となっております。裕生園のように職員が五十人を超える事業所もあれば、職員数三人という居宅介護支援事業所もあります。法人全体としては常勤職員、非常勤職員、合わせて一五〇名を数えるに至っております。

そして、四月一日付けでこのような大所帯の信愛会の統括事務長を命じられました。事業所数、職員数の多さに、自分にできるだろうか、務まるだろうかと不安を感じていましたが、周囲の人たちに助けられながら、日々の業務を何とか行っているところ。至らない部分が多々あるかと思いますが、地道にこつこつと全事業所の職員、ご利用者、ご家族の方との関わりを持ちながら、自分なりにより良い職場環境作り、施設の雰囲気作り、人間関係作り、努め、信愛会の発展に貢献できるように頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

じゃあつわん



特別養護老人ホーム裕生園
介護主任 井上 豊

平成23年4月1日付で介護主任となりました。裕生園に入職したのが平成21年の6月1日で、1年10ヶ月で介護主任という大役に就くことになりました。私自身、副理事長よりお話があった時、正直戸惑いはありました。裕生園へ入職する前は、奈良県の療養型医療施設で勤務し、約5年間介護業務を行っていましたが、介護主任という役職に就くことは勿論初めてですし、責任の重さを日々感じております。今、自分が利用者様に対して何が出来るだろうか、何を行っていったらよいのだろうかと考え毎日ではありますが、園長をはじめ周囲の職員の支えのおかげで何とか通らせて頂いています。

利用者様は、誰一人として同じ考えを持っている人はいません。一人一人今まで歩んで来られた人生は違いますし、出会いと別れを様々な形で繰り返されたと思います。そういった人生経験を持った方々が、今この裕生園という一つの施設で生活をされ、時には笑い、時には悲しみ、時には怒ったりと、喜怒哀楽の中を私達介護職員は共々に分かち合いながらお世話させて頂いております。その生活の中で楽しいと思える日を提供出来るかが、介護職の使命であり、介護主任としての責務だと私自身感じております。

介護主任として未熟な点は今後幾重にもあるとは思いますが、利用者様、ご家族様よりのご意見ご指導を頂きながら努めて参りますので、どうぞよろしくお願い致します。

ケアハウス シャトル

挨拶



ケアハウスシャトル
施設長 小八重 正士

昨年の六月一日に、ケアハウスシャトルの施設長として就任し、早いもので一年が過ぎました。私は、以前、特養施設で、九年間仕事をしておりましたが、利用者の方は重度者が多く、人手もかなり大変でした。

シャトルに参りましたここでは、殆どの利用者の方々が、自分のことは自分でできているので、初めは、どのようにかかわっていったらいいのか、わかりませんでした。毎日、職員、介護現場を見て、又、利用者の反応(状態)を見ながら、何もできないまま月日が経ち、シャトル職員の皆様には、大変ご迷惑をかけて参りました。介護の職場は、心と心のふれあい、そして自分から利用者の中に入り込むことでお互いに、信頼関係が生まれ、毎日が楽しくなっています。今では、職員とも溶け合い、地域の方々との交流もあり、又、利用者の皆様が気軽に参加できるようなゲーム、余興等、多く取り入れ、又、買い物などにも一緒に参加して少しでも、ふれあいの場を作っています。

これからも、職員と共に、利用者の皆様の現状を、悪化させない、あるいは維持していきながら、安心して、楽しく暮らせる、施設づくりに努めて参ります。更に、私に課せられた責務を果たし、感謝の気持ちを忘れずに、このシャトルを最後の職場として、取り組んで参りますので、皆様方のご協力を、お願いいたします。



市民の森公園に花菖蒲見物に出かけました。



ファミリーレストランで昼食。
ビールもうまい!



今日は宮崎育成牧場の見学に来ました。

季節の花に心癒され、ランチタイムでお腹もいっぱい。気分もリフレッシュです。

グループホーム たちばな

グループホームたちばな 管理者 長友美紀

昨年の夏から今年初めにかけてたちばなも尊い命の灯がいくつも消え、寂しい年明けとなりました。しかし、退所手続きの時、どの御家族も口を揃え「たちばなで過ごした〇年間で本人にとって一番幸せだった。日頃家族が思ってもできないことをたちばなでしてもらって有難い」とおっしゃって頂き、その言葉を心の糧として全職員やり甲斐をもって日々のケアに取り組んでいます。

認知症になると「何もできない」と思われがちですが、認知症という病気になると、今まで出来ていたことが出来なくなり、本人は「不安」や「苛立ち」から問題行動（周辺症状）となって表面に現れ、周囲の人々、特に家族に迷惑をかける状態になります。しかし周囲の人々が認知症を理解し接することで、本人も自信を取り戻し、自分という存在を意識し、可能性が広がり、日々の生活に張りが出て来ます。「心のシグナル」を逸早くキャッチし、真正面から向き合い、本人の気持ちをじっくり聞くことが重要なこととなります。

ある利用者の方が「自分達の子供の頃はあつという間に過ぎ去り遠い昔となった。あと何年生きられるだろうか」としみじみつぶやかれ、又「何もいらない。『元気が宝』 あんたたちと毎日健康で楽しく過ごして行くから頼むわね」と笑顔で言われました。これからも一日一日を大切に、「G・Hたちばな」と「たちばなデイ」の全職員で、利用者の方々一人ひとりの今を大事にし、気持ちを汲み取り、ご家族そして地域の人々の協力の下に、真心のこもった「ゆとりケア」を心掛けて行きたいと思えます。



たちばな1号館

毎日「瀬戸の花嫁」を練習した甲斐もあり、大成功のカラオケ大会になりました。



たちばな2号館

お正月、ホーム玄関にて一年の健康を願って記念写真を撮りました。それぞれ個性豊かな方々ですが、相手を思いやる気持ちも人一倍強くあり、家族みたいに日々過ごされています。



たちばな3号館

職員手作りの桜の木の下でハイチース/利用者も職員も元気な3号館です。



たちばなデイサービスセンター

実習生とピンポン玉の打ち合いをしました。楽しいレクリエーション活動になり、盛り上がりました。

きんかん小規模多機能ホーム

地域密着型の“きんかん小規模多機能ホーム”は、こんなに沢山の地域のボランティアの方々に支えられ、2年目に入りました。



きんかんのお隣の方々に、避難場所としてご自宅を提供して下さっている横山ご夫妻、松尾ご夫妻、松浦ご夫妻です。



月に何度か来て頂いて、話し相手や病院受診に同行下さる和田様と大野様です。



毎月の職員会議の際に利用者さん達と一緒に過ごして頂いています。介護福祉士の永田様と高木様です！



毎月2回、音楽療法で来て頂いている木村さん。まだ高校生です。



利用者の方にタクティール（手で触れることによるケア）という癒しの方法で接して下さる井出さん。



防災訓練は、南消防署・浮田・長嶺・生目地区より合同消防団で行われました。

その他にも、毎月の誕生会や行事には、各種サークル、民謡、踊り、器楽演奏などの方々に支援を頂いています。

ボランティアの皆様！！「ありがとうございます！」

しんあいの詩會

毎月一回、ケアハウスシャトルで行われている短歌会で発表された短歌の中から、いくつかをご紹介します。
 作者は、シャトル、裕生園及び信愛園の入居者の方々です。
 (氏名五十音順)



絹はなく木綿の着物紅を着せ

雛祭り娘よろこぶ

岩切 シチ

紅のダリアの花は今朝見れば

ペシヤンと首を下げたまま散る

白井 トキ子

かつぼう着すがた夫と暮らしたり

得意な煮しめよくほめられき

白井 トキ子

離れ住む息子は還暦記念なる

富士登山成せり絵手巾届く

緒方 信子

花のした老集まりて体操し

輪投げやボールおやつの旨し

緒方 信子

類染めて言葉交わさず走りたる

十代の恋そなつかしきかな

下田 欣吾

マラソンを映すテレビに走る人

その健康美たのもしきかな

下田 欣吾

亡き夫が第二ポタンを渡したる女

知りたしと思うこの頃

花田 暢子

ワクチンを打たれてやがて処分さる

牛の主の心を思う

花田 暢子



伊藤一彦先生（後列右から4人目）と短歌会参加者のみなさん
 (平成22年4月 ケアハウスシャトルにて)

なんとなくこの人が好きどうしてか

昔の恋人に似ているから

福本 栄

車椅子乗るな歩けと云う人に

腹立て今は感謝してます

福本 栄

農休日今日は二人で映画観る

和服姿に夫の目やさし

松本 マサ

爽やかな空気吸いたしペランダに

深呼吸して今日が始まる

松本 マサ

夫昼寝年の初めの陽だまりに

百人一首ひとり読みあぐ

森田 琢恵

日々ともに空気のごとくなりゆかん

このままがいい二人の夕餉

森田 琢恵

『しんあいの』第七十二号、第八十四号のなかから『しんあいの』編集部が選びました。

編集後記

昨年発行した『しんあいの』第23号の編集後記に「平成21年は大きなチエンスの年でした」と書きましたが、まさか平成22年、23年と、これほど災害が立て続けに襲って来ようとは思っていませんでした。

営々と築き上げて来た人間の科学技術の成果を無慈悲に圧倒して行く自然の力。絶対的な力の差を見せられて、私達の無力を感じずにはいられません。しかし、ほとんどの人が「日本は必ず復興する」と信じていると思います。世界にもそう思っている人はたくさんいるでしょう。日本は必ず復興を遂げ、より一層絆の強い国になって目の前に姿を現すでしょう。それまで、私達は自分のできる範囲で、できるやり方で、小さな力を合わせ、大きな力にして復興を後押しして行きたいです。



講師の先生方にお礼の花束を贈呈

21年度に引き続き22年度も、手話のできる職員養成のための講座を開設し、毎週1回、約半年間、十人ほどの職員が講師の先生方の指導のもと、手話の勉強をしました。講座の最終日には、職員一人ひとりが手話でスピーチを行い、勉強の成果を披露。聴覚障害について理解を深めると同時に、手話の奥深さにも触れることの出来た講座でした。



毎週1回、約半年間、裕生園の会議室で行われた手話講座



講座最終日には、各自手話を使ったスピーチを披露